

高齢知的・発達障害者における意思決定支援と
アドバンス・ケア・プランニングのあり方に関する研究
—ICF のアプリを活用した意思決定支援の可能性—

分担研究報告書

厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）

障害者支援施設や共同生活援助事業所等における高齢障害者への看取り
マニュアルの実装に向けた研究（25GC1013）

分担研究報告書

高齢知的・発達障害者における意思決定支援とアドバンス・ケア・プランニング

のあり方に関する研究

—ICFのアプリを活用した意思決定支援の可能性—

分担研究者：村岡美幸（国立重度知的障害者総合施設のぞみの園）

日誌正文（国立重度知的障害者総合施設のぞみの園）

研究要旨

高齢の知的障害者・発達障害者は、アドバンス・ケア・プランニング（以下、ACP）を含む意思決定支援の場面で、情報の理解、記憶、比較、意思の表出に困難を伴うことがある。本人の意思や選好を支えるには、人生の出来事、生活上の経験、過去の選択、安心できる環境や関係性を整理した資料が必要である。しかし、その資料作成が支援者にとって大きな負担となる場合、日常の実践で継続的に活用することは難しい。

本研究では、本人の生活歴、支援記録、医療記録等を収集し、紙媒体の記録をPDFスキャナー及びiPadでデジタル化した。そのうえで、AI（ChatGPT）及びICF Coderを用い、記録内容の整理、ライフマップの作成、国際生活機能分類（以下、ICF）の視点による情報の構造化を試みた。

その結果、手書き記録を含む過去記録をデジタル化することで、記録情報の検索と俯瞰が容易になった。過去記録には、本人の日常行動、反応、選好、安心できる環境や人間関係、不安や拒否の表れなど、意思決定支援及びACPに活用し得る手がかりが含まれていた。また、ライフマップを短時間で作成でき、生活の連続性を共有する資料として活用できる可能性が示された。さらに、ChatGPT及びICF Coderによる整理は、言語による意思表示が困難な人の意思と選好を検討する基礎資料となる可能性が示唆された。

一方で、個人情報保護を含む倫理的配慮、手書き記録の判読精度、記録表現や観察視点のばらつき、同一内容の判定に要する時間などの課題も確認された。今後は、AIとICFを活用した方法の安全性と有効性を事例的に検証し、本人意思に基づく支援の質の向上につながる技術的・実践的手法を検討する必要がある。

A. 研究の背景と目的

2017年に障害者の意思決定支援ガイドラインが策定され¹⁾、本人の意思を尊重する支援の推進が図られてきた。

さらに近年は、一般高齢者の間で「終活」が広まり、人生の最終段階における医療、看取りのケア、生活のあり方を自ら選ぶという考え方が社会に浸透しつつある。このような状況を踏まえると、障害のある人についても、最終段階の過ごし

方、療養の場、最期を迎える場所を、本人の希望や価値観に基づいて選択できるよう支援することは、重要な人権保障の課題である。

しかし、現在高齢期にある知的障害者や発達障害者の多くは、成育歴の中で意思形成や意思表示を十分に支えられてこなかった可能性がある。特に、2004年の発達障害者支援法の制定以前に成長した世代では、本人の思いや希望を丁寧に引き出し、表明を支える機会が限られていたと考えられる。その結果、人生の最終段階においても本人が十分な選択肢を持たず、病院等で亡くなる実態がみられる。さらに、本人が「帰りたい」と意思を表出しているにもかかわらず、事業所における24時間対応可能な医師・看護師の確保、個室等の環境整備、看取り経験の乏しさによる職員の不安などが障壁となり、本人の意思よりも病院での最期が選ばれやすい状況があった（国立のぞみの園，2025）²⁾。すなわち、本人の意思が存在しているにもかかわらず、それを実現する支援体制と環境が不足していることが課題である。

人生の最終段階における意思決定は、その時点だけで完結するものではなく、それまでの生活の連続性の中で捉える必要がある。そのため、本人の過去記録を踏まえ、ACPを含む意思決定支援を行うことが重要である。一方で、過去記録は量が膨大で、手書き資料も多い。必要な情報の整理・抽出には多くの時間と労力を要し、実践上の大きな障壁となっている。

上記の背景を踏まえ、本研究は、知的障害者及び発達障害者の人生の最終段階における意思決定支援及びACPに向けて、情報通信技術

(Information and Communication Technology：以下、ICT)及び人工知能

(Artificial Intelligence：以下、AI)を活用した過去記録の整理・抽出方法を支援者に提示し、その有用性、実現可能性及び課題について意見を

聴取することにより、支援現場での活用可能性を検討することを目的とした。

B. 研究方法

1. ICT及びAIの活用による支援対象者の過去記録の整理・抽出

対象資料は、自宅、障害児入所施設、障害者支援施設、共同生活援助での生活歴を持ち、重度知的障害と自閉症スペクトラム症を併せ持つ60代A氏(1名)について、入手可能であった生活歴、支援記録、ケースカンファレンス資料、医療に関する記録等とした。

対象となる資料の形態は、アナログ記録(手書き、ノーカーボン紙等)及びデジタル記録であった。本分担研究は令和7(2025)年度から令和8(2026)年度にかけて実施する予定であり、本報告では、令和7(2025)年度に試行的にデジタル化及び整理・抽出を行ったケースカンファレンス資料を中心に報告する。

使用機器・ツールは、iPad、PDFスキャナー、ChatGPT、ICF Coderとした。

本分担研究は、以下の手順で実施した。

- 1) 収集した資料のうち、個人を特定し得る情報部分に付箋を貼り、画像での読み込みができない状態にした。
- 2) PDFスキャナー及びiPadによる写真画像を用いて、資料をデジタル化した。
- 3) ChatGPTを用いて記録内容を整理した。
- 4) 複数の記録を統合し、ライフマップ作成用のプロンプトを作成した。
- 5) 対象者の生活歴や支援経過を概観できる資料を生成した。
- 6) ICF Coder³⁾を試用し、情報を整理した。
- 7) これまでの生活の中で示されてきた意思、選好、安心できる環境や関係性、苦痛や拒否の表現等を抽出した。

なお、ICF Coder は、2025 年 3 月に尾崎氏により開発されたアプリである。本人に関する情報を ICF の構造、すなわち「健康状態」「心身機能・身体構造」「活動」「参加」「環境因子」「個人因子」の観点から整理し、本人の強みや、活動・参加に関わる環境要因等を客観的に把握することを目的としている。

2) 意思決定支援及び ACP の基礎資料作成に向けた活用可能性の検討

ICT 及び AI を活用して作成した資料及び整理・抽出の方法について、知的障害者及び発達障害者の支援に携わる支援者 5 名、生活支援員、相談支援専門員を対象に説明を行った。説明にあたっては、ICT 機器の画面等を示しながら、過去記録のデジタル化、ChatGPT による記録内容の整理、生活歴や支援経過を概観できる資料の作成、ICF Coder による情報整理、及び本人の意思、選好、安心できる環境や関係性、苦痛や拒否の表現等の抽出方法について提示した。

その上で、支援者に対し、ICT 及び AI を活用した過去記録の整理・抽出方法について、意思決定支援及び ACP の基礎資料作成における有用性、支援現場での実現可能性、活用にあたっての課題や留意点について意見を求めた。得られた意見は、分担研究者が内容の類似性に基づき整理し、カテゴリー化した。

本研究は、国立のぞみの園倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号 07-08-05）。個人情報取り扱いについては、以下の手続きを行った。

1) 本人と家族への説明

- 対象者及び保護者に対し、研究の目的、方法、参加の任意性、個人情報の保護について、口頭及び文書により説明し、書面による同意を得た。

- 本人による署名が困難な場合には、保護者による署名同意を得た。
- 生成 AI の活用方法及び情報管理上の配慮について、対象者及び保護者に説明し、同意を得た。

2) 生成 AI (ChatGPT) の利用

- 氏名、生年月日、画像等、個人を特定し得る情報は入力しないよう配慮した。
- 入力情報が AI の学習に利用されない設定を適用した。

3) 情報管理

- 研究で得られた情報は、国立重度知的障害者総合施設のぞみの園研究部の施錠可能な収納で管理し、本研究の目的以外には使用しなかった。

4) 支援者への説明

- 支援者に対し、研究の目的、方法、個人情報の保護について口頭で説明し、同意を得た。

C. 研究結果

1. ICT 及び AI を活用した過去記録の整理・抽出方法の試行

A 氏の過去のケースカンファレンス資料は、約 290 枚であった。資料には個人情報が含まれていたため、個人を特定し得る情報が記載された部分を紙で覆った上で、PDF スキャナー及び iPad を用いてデジタル化した。匿名化処理及びデジタル化に要した時間は、約 4 時間であった。一方で、手書き資料の中には文字の判読が困難であり、十分にデジタル化できないものもあった。

デジタル化した資料について、ChatGPT を用いて複数の記録内容を統合し、生活歴、支援経過、年表、嗜好等を整理するためのプロンプトを作成し、情報の整理・抽出を行った。その結果、生活の転機、活動への参加状況、本人の関心や嗜好、環境への反応等を時系列に整理した年表を作

成することができた。表1は、作成した年表の一部である。

また、ICF Coderを試用し、A氏に関する情報をICFの枠組みに基づいて整理した。ICF Coderでは、活動・参加に関する情報として、施設内での役割、活動への参加状況、余暇活動への関心等が整理された。また、環境因子に関する情報として、本人が安心しやすい環境、支援者との関係性、活動を促進または阻害する要因等を整理することができた。表2は、整理した情報の一部である。

分担研究者はChat GPTの使用経験が限られていたこともあり、プロンプトの内容によって整理・抽出される情報に違いがみられた。そのため、AIから提示される助言等を参考にしながら、プロンプトを修正し、必要な情報の抽出を行った。情報をデジタル化後、情報を整理・抽出するまでの時間は約1時間程度であった。

以上より、本試行においては、A氏1名のケースカンファレンス資料約290枚について、匿名化処理、デジタル化、ICT及びAIを用いた整理・抽出を行うまでに、合計で約5時間を要した。

2) 意思決定支援及びACPの基礎資料作成に向けたICT及びAI活用に対する支援者の意見の確認

ICT及びAIを活用して作成したA氏の生活歴、支援経過、活動・参加状況、嗜好、環境因子等に関する整理結果を支援者5名に提示し、ICT及びAI活用に対する意見を求めた。その結果、以下の意見が得られた。

- デジタル化により、支援対象者の長期間の記録を把握することの負担感が減る。
- ライフマップや年表の作成が短時間でできるが、修正が必要な文言がある。
- AIに相談しながら、支援計画を考えると、いろいろな支援のアイデアが生まれてくる。

- 手書きも解読してくれるとありがたい
- 分析結果が記録されている内容に左右されるので、活用できる対象者と、できない対象者がいる
- AIの活用については、個人情報や情報のリテラシーの部分で不安がある
- 行動、反応、好む活動、落ち着ける環境、不安や拒否の場面は、本人の選好や価値観を推定する際の手がかりとなった
- ICT及びAIによる整理・抽出結果を見て、記録の視点の不統一、本人の思いや意味づけの記載不足に気づけた。
- ACPでの活用を前提として日々の記録を残すと、もっと本人の思いや好み等を深く理解できるように思った。

得られた意見を内容の類似性に基づき整理したところ、ICT及びAIの活用に関する支援者の意見は、「記録整理及び事務作業の効率化への期待」「本人理解、支援計画及びACPへの活用可能性」「記録内容に依存する整理・抽出結果の精度及び記録の質の課題」「Chat GPT導入に伴う技術的・倫理的課題」の4つに大別された(表3)。

D. 考察

本研究では、ICT及びAIを活用して過去記録を整理・抽出し、その結果を支援者に提示して意見を聴取した。その結果、ICT及びAIの活用により、長期間にわたる記録をこれまでよりも短時間で概観し、年表やライフマップ、所定様式に沿った資料を作成できる可能性が示された。過去記録の整理には多くの時間と労力を要するが、ICT及びAIを用いることで、支援者の記録整理や事務作業の負担軽減につながる可能性があると考えられた。また、所定の様式に合わせた情報抽出やChat GPTとの対話による支援計画の検討が可能であるとの意見もあ

り、支援現場での一定の実現可能性が示唆された。

一方で、Chat GPT による整理・抽出の結果は、入力される記録の内容や質に左右される。記録量が少ない場合や、本人の思い、行動の背景、意味づけが十分に記載されていない場合には、Chat GPT による出力結果にも限界が生じる。そのため、Chat GPT の結果をそのまま用いるのではなく、支援者が内容を確認し、本人の現在の状況や関係者の情報と照合しながら活用する必要がある。また、Chat GPT の活用は、日々の記録において、本人の選好、安心できる環境、拒否や苦痛の表現、支援者との関係性等を意識して記録することの重要性を再確認する機会にもなった。

さらに、ICT 及び AI の導入には、手書き記録の判読、個人情報取り扱い、情報リテラシーといった課題がある。ここでいうリテラシーとは、ICT 及び AI を操作できることに加え、個人情報を適切に取り扱うこと、Chat GPT の出力結果を批判的に確認すること、入力する情報の範囲や出力結果の活用方法を判断することを含む。支援現場で活用するためには、個人情報保護に関する手順、入力情報の範囲、出力結果の確認方法、記録様式の標準化等について、実践可能な運用ルールを整備する必要があると考えられた。

E. 結論

本研究では、ICT 及び AI を活用することが、知的障害者及び発達障害者の過去記録を整理・抽出し、意思決定支援及び ACP に資する基礎資料を作成する際の負担軽減につながる可能性が示唆された。

一方で、Chat GPT による整理・抽出結果は記録内容や記録の質に左右されるため、支援者による事後の確認・修正が不可欠である。今回の検証・検討は、限定的なものであるため、今後は、対象者や記録の種類を広げ、実践現場での活用可能性と運用上の課題について、さらに検討を進める必要がある。

参考文献

- 1) 厚生労働省：障害福祉サービスの利用等にあたっての意思決定支援ガイドラインについて，障発 0331 第 15 号，平成 29 年 3 月 31 日，
<https://www.mhlw.go.jp/content/12000000/000562766.pdf>（2026 年 3 月 27 日閲覧）
- 2) 国立のぞみの園：障害者の看取りを行った事業所が看取りを行った契機と課題に関する研究—障害者支援施設及び共同生活援助事業所へのヒアリング調査を通して—，障害者支援施設や共同生活援助事業所，居宅支援における高齢障害者の看取り・終末期の支援を行うための研究分担報告書（2024），
<https://www.nozomi.go.jp/investigation/pdf/report/03/R06-4.pdf>（2026 年 3 月 27 日閲覧）
- 3) 尾崎尚人：自然言語処理による自動 ICF コーディングシステムの構築，科学研究費助成事業研究成果報告書（2025），
<https://kaken.nii.ac.jp/file/KAKENHI-PROJECT-20K19460/20K19460seika.pdf>（2026 年 3 月 27 日閲覧）

F. 研究発表

第 33 回日本介護福祉学会大会

村岡美幸「ICF を活用した本人視点での個別支援計画の作成に関する研究—共同生活援助事業所で生活する知的・発達障害者 A 氏を対象に—」

G. 知的財産権の出願・登録状況

なし

表1 過去記録のデジタル化とAIによる年表作成

過去の記録をデジタル化し、AI（ChatGPT）に読み込ませて作成した Excel 年表の例である。

時期	年代・日付	出来事	補足
乳幼児期	乳幼児期	けいれん様発作が続いたとの家族申告	約20日間、1日4~5回。数回は一時的な意識消失あり
少年期	少年期	家族で、アパートの2階に居住	生活環境に制約があった
少年期	9歳頃	交通事故で転倒し、近隣病院に入院	約4日入院
少年期	9歳頃	2階から転落し、右足を捻挫	加療後は異常なし
児童期	1971年頃	児童入所施設に10歳で入所	集団生活の開始
児童期	1971年頃	脳波で左中心部にsharp waveの記録	当時は臨床症状なし
児童期～青年期	入所中	集団での散歩などでは一体的な行動が可能	一方で、他児から干渉されることを好まない面もあった
児童期～青年期	入所中	相撲大会に出場	優勝の記録はなし
児童期～青年期	入所中	夕食後に絵日記を継続	書字・表現活動への関心が高い
児童期～青年期	入所中	同じ寮の友人や職員の名前を多く書けた	ノートだけでなく地面に棒で書くこともあった
児童期～青年期	入所中	洗濯物たたみを役割として担当	日常生活上の役割遂行あり
児童期～青年期	入所中	夜間の野球観戦に外出	売り子に強い関心を示した
児童期～青年期	入所中	スキー場外出で初回から滑走できた	以後も参加希望あり
児童期～青年期	入所中	マラソン大会Bコースで4回連続1位	4回目の記録は12分00秒
児童期～青年期	入所中	児童入所施設内の農産科で活動	畑仕事、動物の世話などに従事
児童期～青年期	入所中	農作業を一人で遂行	トラクター運転、間引き、芽かき等
児童期～青年期	入所中	朝の新聞配りを担当	施設職員宿舎への配達
児童期～青年期	8月6日（年不詳）	山への外出	年は不詳
児童期～青年期	入所中	乗り物系の体感型ビデオを好む	特に鉄道の運転室映像など
児童期～青年期	入所中	水痘に罹患	既往歴
児童期～青年期	入所中	食品工場見学後、気に入った食品を家族へ送付	嗜好が明確
児童期～青年期	入所中	輪投げが入らずいらだつ場面あり	不成功時の情動反応
児童期～青年期	入所中	動物の世話を開始時間前に始めることがある	主体性が強い一方、待機は課題
1991年度頃	平成3年度	施設生活に合わせた行動が増える	職員とのやりとりも進展
1992年度前半	平成4年4~7月頃	挨拶を目標に支援が行われる	こだわりの緩和にも取り組む
1992年度後半	平成4年8~12月頃	危険物置場や空き缶へのこだわりがみられる	安全面の配慮が必要
1992年度後半	平成4年8~12月頃	生水の飲み過ぎで体調に影響することがある	健康管理上の課題
1992年度	平成4年度	職員へ自分から話しかけるなど対人面が前進	掃除等の役割も継続
1993年度前半	平成5年1~3月頃	挨拶しようとする意識がみられる	必要性の理解は十分でない面もあった
1993年度前半	平成5年4~7月頃	寮職員とのコンタクトを深める目標が立てられる	状況に応じた挨拶の練習
1993年度後半	平成5年8~12月頃	障害者入所施設への移行が決定	生活の大きな転機
1993年度後半	平成5年8~12月頃	新聞配達中に危険物置場のゴミ袋を開けた記録	こだわり・安全配慮の課題
1994年3月頃	平成5年度末	朝の『おはよう』が習慣化に向かう	作業・飼育で中心的役割を担う
1994年4月頃	平成6年4月15日	起床6時、就寝22時頃の生活リズムが確認される	起床後に新聞配達、本や辞書を見る習慣あり
1994年6月頃	1994年6月頃	評価資料が作成される	身長169.3cm、体重60.0kg、胸囲82.0cm
1994年6月頃	1994年6月頃	会話は可能だが、発音不明瞭・早口・ひとりごと・吃音傾向あり	文字やメモによる伝達は有効
1994年6月頃	1994年6月頃	電話は自分でかけられるか不明	書字でのやりとりは可能
1994年6月頃	1994年6月頃	着衣は自立、汚れを嫌い自発的に着替える	履物も自分で扱える
1994年6月頃	1994年6月頃	都市部の公営住宅で生活	室内は複数の小部屋構成
1994年6月頃	1994年6月頃	文字・数字、列車の本、音楽番組、カラオケへの関心が確認される	嗜好の一貫性あり
1994年6月頃	1994年6月頃	家族背景上、詳細不明な部分が多い	両親死亡後はきょうだいの陳述が主情報源
1994年9月頃	1994年9月頃	家族宅へ短期帰省	買物や整髪などを行い、大きな問題なく経過
1994年10月	1994年10月	せっかちさやこだわりがやや減少したと評価される	行動面の変化

表2 ICF Coder による情報の整理

本資料は、ICF Coder で整理した情報の一部である。ICF イラストライブラリー（ICF の項目を絵でわかりやすく学べる資料）と併用することで、職員が認識できていない情報に気づくための資料として活用できる。

参加に関する整理例

参加

事例内容	主なICFコード候補	解釈
散歩のときは一体的に行動できた	d920 レクリエーションと余暇 / d720 複雑な対人関係	集団活動・集団行動への関与
学園で開催された「すもう大会」に出場	d920 レクリエーションと余暇	施設行事への参加
ナイターの野球観戦に出掛けた	d920 レクリエーションと余暇	余暇・外出行事への参加
大穴スキー場へ遊びに行った	d920 レクリエーションと余暇	レジャー場面への参加
次回のスキー参加も希望していた	d920 レクリエーションと余暇	継続的な余暇参加への意欲
学園のマラソン大会で4回連続1位	d920 レクリエーションと余暇	行事参加の中での成績・達成
農産クラスに所属していた	d825 職業訓練	訓練的・教育的プログラムへの参加
宝登山へ行った	d920 レクリエーションと余暇	外出行事への参加
サイボクハムの工場見学に行った	d920 レクリエーションと余暇	社会見学・地域活動への参加

環境因子に関する整理例

4. Environmental Factors（環境因子）

ICFコード	項目名	解説
e310	Immediate family	姉との関係があり、荷物を送るなどのやりとりがあった。
e325	Acquaintances, peers, colleagues, neighbors	寮の友人との関係。
e330	People in positions of authority	職員との交流や支援。
e580	Health services, systems and policies	水疱瘡への対応や学園生活における健康管理。
e225	Climate	スキー場など屋外活動に関連（季節的・気候的要素が影響）。
e240	Light, temperature, sound	ナイター観戦や屋外活動に関連する環境要因。

表3 利用者の過去情報の整理・抽出のためのICT及びAI活用に関する支援者からの意見

No.	カテゴリー	カテゴリーの内容	該当する意見
1	記録整理及び事務作業の効率化への期待	長期間の記録把握、ライフマップ・年表作成、所定様式への情報抽出など、記録整理や事務作業の負担軽減に関する評価。	<ul style="list-style-type: none"> ・デジタル化により、支援対象者の長期間の記録を把握することの負担感が減る印象を受けた。 ・ライフマップや年表の作成が短時間でできるのは魅力的だし、内容も大きく外れてはいない。細かいところをみると少し修正が必要な文言がある。 ・所定の様式に合わせる形で必要な情報を抽出しやすいので、事務作業の省力化が期待できるのではないかと思う。
2	本人理解、支援計画及びACPへの活用可能性	Chat GPT との対話を通じた支援計画の検討、本人の選好・価値観の推定、ACPを意識した記録活用の可能性に関する評価。	<ul style="list-style-type: none"> ・Chat GPT に相談しながら、支援計画を考えるといろいろな支援のアイデアが生まれる。 ・行動、反応、好む活動、落ち着ける環境、不安や拒否の場面は、本人の選好や価値観を推定する際の手がかりとなった。 ・ACPでの活用を前提として日々の記録を残すと、もっといい分析結果がでるように思った。
3	記録内容に依存する整理・抽出結果の精度及び記録の質の課題	Chat GPT の分析結果が記録内容や記録量に左右されること、分析結果の確認・修正の必要性、記録の視点や記載内容の不足への気づきに関する課題。	<ul style="list-style-type: none"> ・ライフマップや年表の作成が短時間でできるのは魅力的だし、内容も大きく外れてはいない。細かいところをみると少し修正が必要な文言がある。 ・分析結果が記録されている内容に左右されるので、活用できる対象者と、できない対象者がいるように思う。 ・AIの分析結果を見て、記録の視点の不統一、本人の思いや意味づけの記載不足に気づけた。
4	ICT及びAI導入に伴う技術的・倫理的課題	手書き記録への対応などの技術的改善要望、個人情報保護や情報リテラシーに関する不安など、導入・運用面の課題。	<ul style="list-style-type: none"> ・手書きも解読してくれるとありがたい。 ・ICT及びAIの活用については、個人情報や情報のリテラシーの部分で不安がある。